

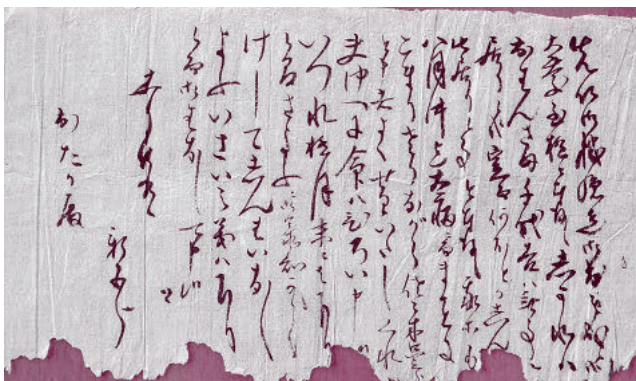


壬生浪士 粕谷新五郎

西暦2018年にあたる本年は、明治維新からちょうど150年の節目になります。常陸大宮市域を含む水戸藩領では、天狗党・諸生党による内乱の惨劇があまりにも有名ですが、その一方で、自ら藩を抜け、主に江戸や京都で活動する藩士も存在しました。後に、明治新政府で要職に就く香川敬三（下伊勢畑出身）がその代表格ですが、他にも多くの藩士が藩の枠組みを超えて活動していました。今回は、その中から、壬生浪士として京都で活動した粕谷新五郎についてご紹介します。

【壬生浪士となるまで】

粕谷新五郎は、文政3（1820）年に野口平村（現常陸大宮市野口平）で誕生しました。彼の生い立ちに関する詳細はよく分かりませんが、幼少の頃から剣術を好み、水戸藩には目付役として仕えたという記述が残されています。その後、安政5（1858）年に孝明天皇から水戸藩へ密勅が下賜されると（戊午の密勅）、新五郎は尊王攘夷論を唱え、勅書返納への反対運動を展開していきます。新五郎の息子である粕谷親之介が記した「履歴書」（明治26年5月作成）によると、万延元（1860）年には江戸の薩摩藩邸へ同志36人と赴くも、幕府の命によってそのまま幽閉され、翌年12月に水戸へ送還されています。文久3（1863）年2月、将軍徳川家茂の上洛が決定すると、新五郎は将軍警護のために組織された浪士組に参加します。浪士組は同年3月に京都から江戸へ帰還しますが、新五郎はこれに同行せず、芹沢鴨や近藤勇らとともに京都へ残留したと云われています。この時に残留した者たちによって壬生浪士組（後の新選組）が組織され、新五郎も組織の一員として加入しました。



粕谷新五郎書簡（個人蔵）

【壬生浪士としての新五郎】

粕谷新五郎といえば、平成15（2003）年に放送された大河ドラマ『新選組！』の劇中に登場したことで知られています。しかし、新五郎が壬生浪士として活動した期間は、ごく僅かであったと考えられます。文久3年3月時点で新五郎が組織に在籍したことは判明していますが（『新撰組全隊士録』より）、同年8月には大病を患って江戸に戻っており、この時には既に壬生浪士組を脱退していたと考えられます。また、この間の消息が不明であることから、早い段階で組織を抜けていた可能性もあるでしょう。脱退後の足跡に関しては、新五郎が妻のたかに宛てた書簡の中で、「（文久3年ヵ）8月中迄大病ニ而まことにこまりをりながら、佐々木只三郎と申者よくせわいたしくれ、夫ゆへに命ハひろい申候」と記しており、後に京都見廻組の中心となる佐々木只三郎とつながりを持っていたことがうかがえます。

【晩年と死】

その後、水戸藩に戻った新五郎は、元治元（1864）年3月に筑波山で天狗党が挙兵すると、これに乗じて参戦したと云われています。そして、同年6月、小山（栃木県小山市）の持宝寺にて自刃し、その生涯を閉じました。新五郎の死後、子孫によって新五郎の墓碑が作られましたが、死後42年が経過した明治39（1906）年になってからのことでした。

野口平地区にある粕谷家の墓所の一角に、新五郎の墓が伝えられています。現在も、墓碑の存在を聞きつけた新選組ファンの方が時々墓前を訪れるそうです。



粕谷新五郎の墓碑（野口平地区）

新五郎をはじめ、幕末期の動乱を戦った志士の中には、歴史の舞台から忘れ去られた人物が多数存在しています。明治維新から150年を迎えた今日、そんな彼らに思いを馳せてみてはいかがでしょうか。

※粕谷孝明さんにご協力いただきました。

【参考文献】

・古賀茂作・鈴木亨 編『新撰組全隊士録』講談社
平成15年